

2010年度 日本佛教学会大会研究発表レジュメ

発表者： 小林 圓照（花園大学）

日時・会場：9月16日 14：20－14：40 大谷大学メディアホール

共同研究テーマ：「経典とは何か」、サブテーマ：「仏説の意味」

発表題目： 「仏説と祖説」

1 はじめに一仏教と仏説・仏法・仏道について

仏教とは、一応「仏の教え」と解釈して、まず「仏陀（覚れるもの）・釈尊の説かれた教え」と理解でき、つぎに実践的・主体的に「佛陀に成る教え」とも受け取れる。仏教はまた同義的な三視点から「佛説・仏法・仏道」とも呼ばれるが、佛説は仏の自覚とその真理すなわち仏の自内証（自覚の内容）から発する説示を中心に、仏法は法（真理）を中心に教説・教理的な面（法灯明）から、仏道は実践者（修行の主体）である僧を中心に実践的面（自灯明）から理解でき、広義の「仏説」は、この三視点を包括しているともいえる。よって仏教を学ぶことは、仏教構成の三要素である三宝（仏・法・僧）の教説的・体系的な構造の理解とその実践的な把握を意味し、また歴史的・社会的実態をもつ、仏・法・僧の時代的、地域的、対機的な展開を学ぶことでもある。

2 仏説と諸仏説

仏が仏説の主体（説主）であるから、釈尊御一人が当然、説主となる。そこから仏説の時・場・対象・自然的・社会的環境なども考慮されよう。よって仏世尊の説法以外は非仏説ということになる。しかし説主の多様性すなわち多仏の存在を認める段階では仏説内容自体も多様となる。歴史的事実であれ、説話的伝承であれ、過去仏の諸仏説の仏から仏への伝灯も可能となり、それは三世・十方の浄国土に展開する。いっぽう永遠の唯一実在の現れと見る仏陀やマンダラ世界の中心仏と周辺の諸仏・諸菩薩、唯心的な仏陀（心仏）に及ぶ大乘諸仏の説法は新仏説ともいうべき飛躍的な内容となる。ただ肝心なことは、大乘仏説は、三宝帰依の根本と釈尊の仏伝が運ぶ遺伝子の結束と不連続ではないことである。

3 仏説と祖説

日本仏教の多くの場合、宗派として宗旨をもち宗祖にはじまる。宗派所依の経典として、主に大乘仏典が選ばれる。法華経、浄土三部経、華嚴経、大日経などである。さらに宗祖の教説（祖説）が経典として追加される。事実上、仏聖典以上に、祖説の経典が尊重依用される場合があり仏説と祖説との一致・調和が問題視される可能性もある。

4 祖師禅における仏説と祖説

一般に「不立文字・教外別伝」を標榜する祖師禅は所依の経典を持たない。仏説である経典に依拠せずただ「以心伝心」の伝承となる。ここでは仏説ではなく仏説の心（仏語心）が核であり、仏説の一字不説と伝法の伝・不伝が問題となる。西天の二十八祖、唐土の六祖といわれる程に、仏祖の伝灯が重視されるのであるが、仏祖（仏と祖）と祖仏（祖という仏・仏といえる祖）の視点から、祖仏の説示としての仏説の在り方を『臨濟録』によって明らかにしたい。

キーワード（新仏説、祖説、祖仏） 以上